資 料

日本養豚学会と国際養豚獣医学会 (IPVS) との関係 —IPVS Congress 出席の記録—

丹羽太左衛門・山本孝史*

日本養豚学会

* 東京農業大学農学部

(2009 年 8 月 7 日受付, 2009 年 8 月 10 日受理)

ま え が き

畜産に関連する代表的な国際学会には、世界畜産学会 (World Association of Animal Production), 世界獣医学会 (World Veterinary Association) 等があり、また各国にはそれぞれの対応学会 (日本畜産学会 Japanese Society of Animal Science, 日本獣医学会 The Japanese Society of Veterinary Science) があるほか、地域的 (北米, 中・南米, ヨーロッパ, アジア, アフリカ等) にもその連合学会 (たとえばアジア・大洋州畜産学会 The Asian-Australasian Association of Animal Production Societies, AAAP) があってめざましい発展がみられている。また、専門分野別に細分化した各学会 (たとえば、畜産学会の場合、家畜の育種、繁殖、飼養管理、飼料、環境、衛生、生産物〈乳・肉・卵およびその加工品〉、経営等の学会) がみられ、研究の範囲も従来の畜産学、獣医学等の領域に止まらず、生物学、分子生物学、医学、基礎科学、応用工学等の分野にまで深く関わってきている。

そして、研究の対象動物は、家畜、家禽、実験

動物等広範囲にわたるが、単一の家畜を対象とする学会はあまり見あたらない。

日本養豚学会は、豚 (養豚) およびその関連分野の基礎的並びに実際の課題の研究と実地貢献を目的とする世界的にもあまり類例のない特色ある学会で、昭和 39 年 (1964 年) 2 月に設立され (当初は日本養豚研究会 The Japanese Society of Swine Husbandry Research, 1987 年日本養豚学会 The Japanese Society of Swine Science に改組)、本年創立 45 周年を迎えた。

国際養豚獣医学会 International Pig Veterinary Society (IPVS) は、養豚の各分野とくに獣医衛生関係の研究発表、各国間の情報交換等を目的として 1969 年に設立され (日本養豚学会より 5 年後の設立)、日本養豚学会とは関係の深い学会である。設立以来、下記のように大体 2 年ごとに学会大会が開催されているが、日本養豚学会 (旧日本養豚研究会) からの正式参加は第 4 回 (1976 年: 昭和 51 年) 以降である。

日本養豚学会とは関係の深い学会であるが、従来あまり知られていないこともあるので、この際、温故知新の意味も含めて、会員出席の記録を

Relationship between The Japanese Society of Swine Science and The International Pig Veterinary Society (IPVS)

—Records of our participation to the IPVS Congress—

Tazaemon NIWA and Koshi YAMAMOTO*

The Japanese Society of Swine Science

* Tokyo University of Agriculture, Atsugi, Kanagawa, 243-0034, Japan

連絡者: 山本孝史 (E-mail: k3yamamo@nodai.ac.jp Tel. 046-270-6595)

表 1. 国際養豚獣医学会大会 (IPVS Congress) 出席の記録

回次	開催年月日	開催地	発表演題数 (わが国からの演題数)
1	1969.06.23～06.28	英国, ケンブリッジ	127 (1)
2	1972.05.23～05.26	西ドイツ, ハノーバー	179 (0)
3	1974.06.12～06.14	フランス, リヨン	188 (1)
4	1976.06.22～06.24	米国, アイオワ	381 (6*)
5	1978.06.13～06.15	ユーゴスラビア, ザグレブ	162 (3)
6	1980.06.26～07.03	デンマーク, コペンハーゲン	355 (12)
7	1982.07.26～08.01	メキシコ, メキシコシティ	339 (9)
8	1984.08.27～08.31	ベルギー, ゲント	357 (6)
9	1986.07.15～07.18	スペイン, バルセロナ	455 (8)
10	1988.08.14～08.17	ブラジル, リオデジャネイロ	380 (6)
11	1990.07.01～07.05	スイス, ローザンヌ	489 (11)
12	1992.08.17～08.20	オランダ, ハーグ	625 (9)
13	1994.06.26～06.30	タイ, バンコック	538 (29)
14	1996.07.07～07.10	イタリア, ボローニャ	678 (15)
15	1998.07.05～07.09	英国, バーミンガム	747 (7)
16	2000.09.17～09.20	オーストラリア, メルボルン	605 (10)
17	2002.07.02～07.05	米国, アイオワ	683 (5)
18	2004.06.27～07.01	ドイツ, ハンブルグ	846 (6)
19	2006.07.16～07.19	デンマーク, コペンハーゲン	942 (6)
20	2008.06.22～06.26	南ア連邦, ダーバン	922 (9)

*: うち 1 題は基調講演。

注: 詳細は下記にまとめられている。

第 4 回: 丹羽太左衛門, 日豚研誌 14, 3. 150, 1977

第 5 回: 丹羽太左衛門, 日豚研誌 16, 3. 290, 1979

第 6 回: 丹羽太左衛門, 日豚研誌 18, 1. 53, 1981

第 7 回: 丹羽太左衛門, 日豚研誌 20, 2. 112, 1983

第 8 回: 丹羽太左衛門, 日豚研誌 22, 2. 131, 1985

第 9 回: 吉本 正, 日豚研誌 23, 4. 228, 1986

第 10 回: 久米勝巳, 日豚会誌 25, 4. 197, 1988

第 11 回: 東 量三, 日豚会誌 28, 2. 143, 1991

第 12 回: 東 量三, 日豚会誌 30, 2. 165, 1993

第 13 回: 小久江栄一, 日豚会誌 32, 2. 126, 1995

残し, 今後の発展を期待する資料としたい。

した。

国際養豚獣医学会大会 (IPVS Congress) 出席の記録

第 1 回より第 20 回までの開催年月, 開催地, 研究発表の演題数とわが国からの演題数を表 1 に示

第 4 回大会について

第 4 回大会は, 日本養豚学会と国際養豚獣医学会とが緊密な関係を持つに至った最初の学会であるのでやや詳しく記録する。そのきっかけは, 大会

の前年に第4回の事務局長 Dr. Norman E. Hutton (米国アイオワ州立大学教授: 当時) から本学会丹羽太左衛門会長あてに, 第4回 IPVS Congress の総会において基調講演(「東洋における豚肉生産について Pork production in the Orient」)を行うよう依頼があり, これを受けて公式出席したのが始まりで, 以後わが国からの本学会大会への出席が増加した。

会場と学会の構成

会場はアイオワ州立大学で, 学内の新しい2つの建物を中心とし, 大, 中, 小19室の会議場があり, 宿泊には学内の Union Hotel および学寮があてられた。会長は, 故 Dr. Howard W. Dunne (ペンシルバニア州立大学獣医学部教授, 家畜疾病研究所長) であったが, 前年に逝去のため未亡人が出席, 実際の会長は Dr. W.E. Brandt, 大会事務局長は Dr. Norman E. Hutton であった。開催にあたり米国農務省, アイオワ州立大学, 関係団体, 会社等からの強力な支援を受けた。学会の公用語は, 英語, ドイツ語, フランス語, スペイン語で, 同時通訳により任意のものが聴講できるようになっていた。

参加国と参加者数

参加国は40カ国, 参加者数は1,260名であった。

学会の日程と内容

第1日(6月22日)午前の開会式総会では事務局長, 大会会長, アイオワ州立大学長その他の歓迎挨拶の後, 次の3題の基調講演が行われた。

基調講演:

1. 予防医学—その科学と技術—
Dr. Richard H.C. Penny
(英国, ロンドン大学獣医学部)
2. 東洋における豚肉生産について
Dr. T. Niwa 丹羽太左衛門
(日本, 岩手大学農学部)

演者はまず, この第4回国際養豚獣医学会開会式総会において, 基調講演を行う機会を与えられたことを感謝し, 日本には1964年に設立され13年(当時)の歴史をもち約1,000名の会員を擁する日本養豚研究会(現学会)が活躍していることを紹介し, 今回この国際的なIPVSと連携をもつ

ことが出来たことを非常な喜びとし, 今後緊密な連絡協調を心から希望する旨を述べたのち, 本論の講演を行った。本論の内容は, 次の8項目から成るものであった。

1) 東洋における養豚の歴史と背景 2) 豚の飼育頭数と豚肉生産量 3) 生産の規模と形態 4) 豚の品種と生産能力 5) 飼養管理の方法と管理のシステム 6) 豚の主な疾病 7) 生産物の処理と流通 8) 今後の問題点とこれらに関連する研究のプログラム

3. 東ヨーロッパにおける豚肉生産の概況

Dr. Oskar Böhm (ユーゴスラビア国, スロベニア獣医学研究所)

一般講演(研究発表):

第1日午後, 第2日午前, 午後, 第3日午前, 午後, 8会場で専門分科会が開かれ, 計380題(下記)の研究発表があり, 熱心な討議が行われた。

栄養(14題), 飼料添加物(15題), 化学療法(10題), 豚舎と環境(12題), 繁殖生理(31題), 繁殖病理(12題), 乳房炎, 無乳症(6題), 豚水疱病(7題), 仮性狂犬病(14題), 豚コレラ(15題), 脳炎(7題), 大腸菌症(24題), 伝染性胃腸炎(17題), 豚赤痢(29題), その他の腸疾患(11題), サルモネラ症(6題), 寄生虫病(15題), 萎縮性鼻炎(10題), 肺炎(23題), 運動器障害(10題), 膿瘍(5題), 中毒(12題), 豚ストレス症候群(8題), 遺伝(7題), 生理(13題), 免疫(6題), 生産プログラム(13題), 外科手術(7題), 臨床医学(24題)

以上の各部門にわたる研究発表は, いずれも貴重なものであり, 活発な質疑, 追加等が行われ, 有意義に終了した。なお, 丹羽は第2日と第3日に繁殖部門の座長をつとめた。

わが国からの出席者と研究発表

出席者(敬称略): 波岡茂郎(北大獣医), 中瀬安清(北里研), 松原利光(麻布大), 山之内鉦実(愛媛県, 開業), 清水悠紀臣(農水省家衛試), 古市幸正(三重大農), 伊沢久夫(北里研), 丹羽太左衛門(岩手大農), 計8名。

研究発表:(5題)

中瀬, 木村, 下田(野外条件下における萎縮性

鼻炎に対する不活化 *Bordetella bronchiseptica* ワクチンの有効性)

波岡 (哺乳子豚の下痢)

伊沢, 添川, 長林 (ウイルスで持続感染させた豚腎臓細胞培養からの豚コレラウイルスの 1 変種)

清水, 古内 (豚伝染性胃腸炎ウイルスの弱毒株による子豚の免疫)

石川, 古内, 杉林 (豚の唾液アミラーゼ)

付帯行事

第 1 日終了後に夕食懇親会, 最終日には Union Hall で盛大な晩餐会が行われた。学会終了翌日にはアイオワ州立大学獣医学部, 国立家畜衛生研究センター, 養豚農家などの見学旅行 (バス) が行われた。

また会期中, 会場内には養豚施設, 管理・衛生器具, 器財, 薬品, 豚肉加工品等の展示も行われていて賑わっていた。

学会の印象と特記事項

今回の第 4 回 IPVS 大会の開催は米国では初めてのことであったが, 学会の準備, 運営その他万端に行き届いた配慮がなされ, 出席者一同深く感謝した。

出席者は最新の研究について発表を聞き, 情報交換を行い, 親睦の実をあげ, 非常に有益であったことを痛感した。

なお, この国際会議に中華民国 (台湾) から李崇道博士, 戈福江台湾大学教授 (台湾養猪科学研究所長) はか数名の方々が出席されていたが, 会期中, 李, 戈両先生と丹羽会長との間で日華 (中日) 両国の友好親善, 養豚学術の交流等について意見交換の結果, 今後日華両国で定期的に養豚研究会議を開催することについての希望が一致した。帰国後, 両国関係学会・機関の同意を得て, その翌年 (1977 年) から両国交代で, 1 年おきに「日華 (中日) 養豚研究会議」を開催し, (第 9 回 <1994 年> まで), 多大の成果を収めた。このことは, 第 4 回 IPVS 大会出席を契機として得られた記念すべきことがらであった。(詳細は, 丹羽太左衛門, 第 4 回国際養豚獣医学会議 (IPVS) に出席して 日豚研誌 14, 3. 150, 1977 参照)。

第 5 回以降の学会内容

第 5 回以降の IPVS 大会は表 1 のとおり 2 年ごとに世界各地で開催され, 成功裏に終了している。

学会内容は, 本学会設立以来「養豚獣医学会」の名称で示されているとおり, 豚の飼養管理, 養豚経営上きわめて重要な条件である豚病の防遏, 衛生的な飼養管理, 清潔な豚肉の生産・処理等に重点が置かれ, 獣医学の基礎的並びに実際研究の進歩と共に内容も広く, 深化してきている。

第 5 回以降, IPVS 学会がその内容を “Hyology and Hyoiatrics” と明記しているように, 養豚の生理的な面 (豚生産) と獣医衛生学的な面から養豚全般にわたる諸事項を含む広汎な内容となっている。(Hyology とはギリシア語で Pig Science, Hyoiatrics は豚の衛生 Medical treatment を意味する語といわれる)。そして獣医衛生学を中心とする研究, 近年著しく発展しつつある関連分野の基礎的研究をも含む広汎な内容のものとなっている。

お わ り に

上記のごとく, わが国からは, この国際養豚獣医学会 (IPVS Congress) には第 4 回以来出席して研究発表を行い, また座長をつとめるなどして学会の運営に協力してきた。学会では最新の研究状況を聴取すると同時に, 広く各国の研究者たちと情報交換, 親睦し, 多大の成果をあげてきたことは喜ばしい。学術は日進月歩である。今後, 関係学会への積極的参加によって世界各国の学術水準を直視し, わが国学会の内容充実・発展に資することを念願してやまない。

終わりに, 学会出席経験の老会員からの希望として「今後関係の (養豚の各分野, 生産物を含む) 国際学会に出席して研究発表を行う会員に対して, 少額でもよいから出席準備費の一部補助を行ってはどうか (但し, 出席者は帰国後その結果を養豚学会大会で発表し, 学会誌にその概要を報告して広く会員にその成果を分かつことを条件とする)」をご考慮願えれば幸いと思う。

(付記)

わが国で豚を対象とする学会, 研究会としては, 日本養豚学会の他に, 日本豚病研究会, 日本 SPF 豚研究会等がある。

なお, 国際養豚獣医学会 (IPVS) の地域学会と

も言うべきアジア養豚獣医学会 (APVS) の第 4 回大会 (APVS2009) が 2009 年 10 月 26~28 日つくば国際会議場「エポカルつくば」で開催される (第 92 回日本養豚学会大会と同時開催)。ご盛会を祈る次第である (本誌 45 巻 4 号参照)。